

10. 文学碑

あべ いちろ

安部 一路 句碑 (昭和32年7月25日建立、祝津町 室蘭水族館構内)

じり ほうらい
海霧はれて 蓬莱の池 美しき

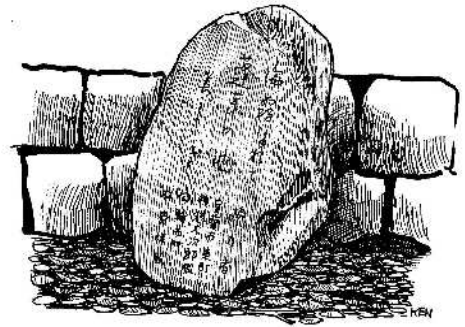
本名を安部一良といい、明治42年(1909)札幌郡で生まれました。昭和3年(1928)に札幌一中を卒業し、同19年に日鐵室蘭製鉄所(現新日鐵住金株)に入社。同社宅内の句会「水曜会」と、町の句会「いぶり」に参加しました。

昭和28年(1953)、道立として建設された水族館の構内が、まだ未整備で寂しかったことから、同32年に、2代目館長の谷口達三と、室蘭民芸協会会員で立雲寺住職の林瞬祥(はやししゅんしょう)らが、現在の売店と事務所の間に「蓬莱の池」を造りました。この池の名を広めるため、池の名を詠み込んだ句を「水曜会」に依頼したところ、一路の句が選ばれました。

碑の文字は、元室蘭市長で書家の長谷川遅牛(正治)の筆によるものです。

その後、池は埋め立てられ、碑はその時に現在地の事務所裏手にある防空壕跡の入り口に移されました。なお、現在水族館構内にある魚藍観音像と安部一路句碑は、林瞬祥によって、同時に建立されたものです。

室蘭民芸協会とは、益子焼をはじめとする陶芸作品などの愛好家の会のことです。



しんどう せんしょう

進藤 千晶 句碑 (昭和52年7月3日建立、増市町1丁目 進藤邸内)

本名を進藤千代といい、大正13年(1924)に山形県米沢市に生まれ、8歳の時に室蘭に移住しました。室蘭高等女学校(現清水丘高校)を卒業後、昭和17年(1942)から2年間、武揚国民学校で教鞭を執りました。

昭和25年、地元の「いぶり吟社」に入会して俳句を作り始めました。昭和34年(1959)には、住んでいた清水町の婦人部で「しみず俳句会」を発足、会報なども出し、活発な句作活動を続け、生涯を通しての作句は5千句を超えたともいわれ、昭和49年に第1回室蘭市民文芸奨励賞を受けています。

昭和51年(1976)11月、句会の帰りに自宅に向かう途中、脳いっ血で倒れ、52歳で他界。後に夫の進藤二郎らによって、遺句集『ひとへ帯』が発刊されました。

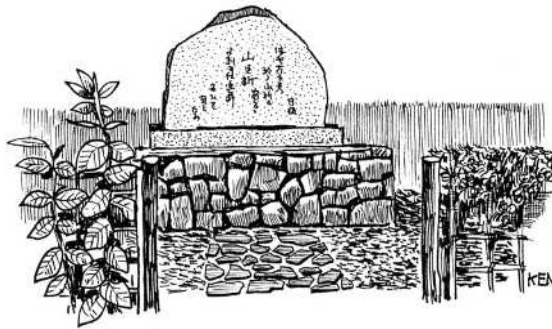
自宅の庭に建立された句碑は、俳句などに迷っていた時期の作品で、建立に当たっては、母亡き後、自らも俳句を作り始めた長女芙美子(雅号:芙蓉)と長男の良雄が、立ち寄った島根県松江市の小泉八雲旧邸の庭にある高浜虚子の小さな句碑にヒントを得たということです。

楕円形で肩の線がなだらかな日高沙流川の蛇紋岩に、遺筆の俳句が刻み込まれた高さ0.8mほどの句碑は、四季折々の花と家族や友友の愛情に見守られながら、ひっそりと座しています。



たまらぬ
思ひにしめる
ひとへ帯

さちのや もりお

幸能舎 守雄 歌碑 (昭和61年4月19日建立、八幡神社境内)

はや万都美
ま つ み
 於久山祇も
お く や ま つ み
 安ら多世に
あ ら た よ
 よ利亭仕遍舞
り て つ か へ む
 色そ見え多類
いろ た る

本名 佐藤守雄は、安政2年(1855)山形県庄内藩鶴岡の城下で生まれました。幼少時代から英才ぶりを発揮しましたが、13歳で藩政革命運動に身を投じ、逮捕された際、左足の筋を切られ、歩行に支障を来しました。

明治12年(1879)に上京し、神道事務局に奉職。後に大社教に身を投じて北海道に渡りました。同27年(1894)に札幌の宿屋で、当時室蘭で旅館を営み、自由民権運動に参加していた本多新と知り合い意気投合。本多の勧めで同年、八幡神社初代社司として来蘭しました。

短歌をはじめ俳句、川柳、漢詩に通じ、書画、茶道などにも造詣が深く、生活が安定してくると、なお一層それらの趣味と教養を深めていきました。「幸能舎(さちのや)」と号して、特に短歌、俳句は北海道において指導者としても活躍し、その道に大きな功績を残しました。大正から昭和にかけては、日鋼俳壇の選者を務めています。昭和11年(1936)、御傘山神社で82歳の生涯を終えました。

自筆で書かれた碑文は、昭和3年(1928)の新年歌会始めに、北海道から初めて入選した詠進歌で、勅題は「山色新(やまいろあらた)」よ。この歌を作ったのは、昭和2年、昭和天皇即位の大典が行われた年で、「人里に近い山も、奥の山も、新しい昭和の御代に協力して仕えましょう」という内容です。碑石は、雨に濡れると苗色が浮き上がってくるという、埼玉県産の青葉小松を用い、守雄の孫である室蘭八幡宮司、奈良守房が亡父瑞穂の遺志を継いで建立しました。神社境内、手水舎の横に位置しています。

詠進歌とは、歌会始の儀に際して、和歌の詠草を進献することです。

本多新は、室蘭教育の祖とも呼ばれ、常盤小学校の開校に尽力しました。

苗(なえ)色は、稲の苗のような淡い緑色、伝統色名。

むなかた しこう ばんがひ

棟方 志功 版画碑 (昭和32年8月20日 水族館構内に建立、平成9年6月20日 海岸町旧「港の文学館」横に移設再建、平成25年11月1日「港の文学館」の移転に伴い、隣接地に移設)

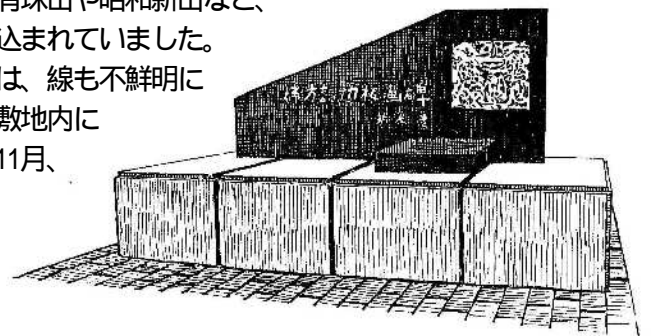
版画界の巨星といわれた青森県出身の棟方志功(明治36年生れ)は、室蘭民芸協会会員で立雲寺住職の林瞬祥らの招きで、昭和31年(1956)と翌32年に来蘭し、作品の実演や展示会を行いました。

昭和50年(1975)9月、72歳で亡くなった志功の偉業を後世に伝えようと、日本最初の版画碑を、青森県人会の神惣次郎会長が中心となって、昭和32年8月20日に水族館構内に建立しました。「室蘭版画の柵」と題された碑は、棟方志功全集に載っている有珠山や昭和新山など、噴火湾を囲む雄大な自然を描いた青銅の鋳型が埋め込まれていました。

海に近かったため塩害も加わり老朽化が進んだ碑は、線も不鮮明になったことから、平成9年(1997)6月に旧港の文学館敷地内に移され、新たな碑として建立されましたが、同25年11月、同文学館の移転に伴い、碑もその隣接地と一緒に移されました。

港の文学館には、志功にまつわる作品などが数多く展示されています。

碑は、変形五角形の黒御影石で、もっとも高い所で高さ0.8m、横1.8m、奥行き0.2m、真ちゅう製の複製版画がはめ込まれています。揮毫は、元北海道知事の田中敏文です。



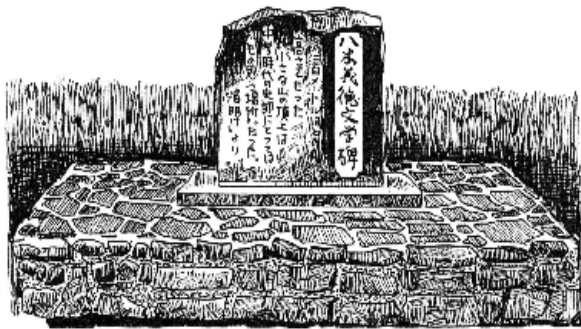
碑は、「版画碑」ではなく「**板画碑**」となっています。志功は「版」という板の半分を表現した字を使うよりも、その土台である板という字の力強さから、昭和17年(1942)頃の作品から「木版画」ではなく「**板画**」という字を好んで使いました。

やぎ よしのり
八木 義徳 文学碑 (昭和55年11月6日建立、清水町、測量山観光道路沿い)

明治44年(1911)、札幌通4丁目(現中央町1丁目)で、室蘭町立病院院長の庶子として生まれました。武揚小学校から旧制室蘭中学校(現 栄高校)に進み、剣道に熱中しました。文学に縁のない硬派でしたが、たまたま友人に薦められた有島武郎の小説『生まれ出づる悩み』『カインの末裔』を読み感動を受け、文学に目覚めました。外国航路の船乗りになるのが夢でしたが、視力が弱かったため断念します。やむなく海に関係のある北海道大学水産専門部に進学しました。

しかし、2年目あたりから学業に幻滅し、ドストエフスキー全集を読破。特に『カラマーゾフの兄弟』から甚大な感動を受けました。20歳の夏、級友と2人で樺太に放浪の旅をし、終点で不足した宿代を踏み倒したため、その代償として「ジャコ鹿(浮浪者)」として、約1カ月間の重労働を科せられています。この体験から左翼思想に入っていく、当局の左翼学生弾圧によって北大を自主退学させられました。

その秋、上京し、受講した夜間のロシア語講座の講師には、小林多喜二、宮本百合子、佐多稲子らがいました。左翼運動の仲間の一人が逮捕されたことから、満州に逃亡の果て、ハルピンで自殺未遂を起こしますが、同宿の軍の慰安婦2人に助けられます。その後、思想容疑者として室蘭に押送され、思想係検事の取り調べを受け、転向して釈放されました。留置場を出てからは、当時ほとんど訪れる人のいなかった測量山の山頂に座り込んで、ドストエフスキーを読みふけり、何度読んでも新鮮な感動を与えてくれる文学の力に魅せられ、自分でも小説を書きたいと思うようになりました。



この一百メートルほどの
高さをもった
小さな山の頂上は
中学時代の甲郎にとっては
もの思つ場所 だった
「海明け」より

昭和8年(1933)に早稲田大学仏文学科に入学、横光利一に師事します。昭和12年(1937)、「早稲田文学」に発表した樺太放浪時代を題材とした『海豹(アザラシ)』が、芥川賞の候補となりました。

昭和19年(1944)、中国人工員をモデルにした短編小説『劉廣福(りゅうかんふう)』で芥川賞を受賞。受賞通知は、軍務に就いていた中国で受け取りました。復員後、すでに前年の東京大空襲で妻子が亡くなっていたという悲運に遭遇しましたが、これを克服し、作家活動に専念。作風は、自らの人生を元に深い人生的思索と故郷や満州に題材を求めたものも多く、中央文壇に地位を確立しました。

昭和52年(1977)から北海道新聞に連載した『海明け』には、室蘭中学時代の様子が描かれています。同年、『風祭』で読売文学賞、同57年には室蘭市栄誉賞、同63年には道内文化関係者で初の日本芸術院賞恩賜賞、平成元年(1989)11月に北海道新聞文化賞、さらに翌年には、芸術文化では数少ない勲三等瑞宝章を授章し、国内トップの芸術家で功績顕著な人だけが選ばれる日本芸術院会員に決定。これら数々の功績を称え、平成2年1月、室蘭市名誉市民に選ばれ、同年に第38回菊池寛賞を受章しています。

“私の文学は、血と、土と、そして海風から生まれる”という八木文学の原風景の地、測量山の中腹に、旧制室蘭中学校の同窓会「白鳥会」によって昭和55年(1980)に碑を建立。同年11月6日の除幕式には、八木本人も正子夫人と共に出席しました。縦0.8m、横1.4mの黒御影石に『海明け』の一節が自筆で刻み込まれています。題字は、越谷潔です。

平成11年(1999)10月、港の文学館には、八木義徳記念室が新設され、生原稿、各賞の正賞など多くのゆかりの品が展示收藏されています。八木は、このオープンを見届けるかのように翌月の9日、肺炎のため88歳の生涯を閉じました。

有島武郎 (1888-1923、東京市出身) 作家。
ドストエフスキー (1821-1881、ロシア帝国生) 作家、思想家。
小林多喜二 (1903-1933、秋田県出身) 作家。
宮本百合子 (1899-1951、東京市出身) 作家、評論家。
佐田稲子 (1904-1998、東京市出身) 作家。

横光利一 (1898-1947、福島県出身) 作家、俳人。菊地寛に師事。新感覚派。
「海明け」とは、岸に張りついていた流氷が解けて、海面が現れて来ることです。
八木義徳は、室蘭出身の初の芥川賞作家で、平成23年に生誕100年を迎えました。八木の作品と生涯については、港の文学館発行の冊子『生誕100年八木義徳の世界 血と土と海風から』をご覧ください。

なみき ぼんべい

並木 凡平 歌碑 (昭和26年7月15日建立、常盤町 常盤公園の丘)

ここだけは 鐵の唸りも 聞えない
電信兵の 波のささやき

本名を篠原三郎といい、明治24年(1891)札幌郡元村で生まれました。大正末期から昭和初期にかけて、全道に口語短歌の全盛時代を築き、口語短歌の鬼才といわれました。室蘭の現代語短歌結社「炭かすの街詩社」を主宰する泉孝によると「おれは路傍の並木みたいな男といって、ペンネームを並木凡平と付けた」ということです。

「北海新聞」を振り出しに、実に42社もの新聞記者を経験した凡平は、昭和12年(1937)、それまで18年間勤めていた小樽新聞社から、突然退社を命ぜられ失業します。以来、自作の口語短歌を銚子やコップに刻み、全道を売り歩く生活をしていました。

昭和14年4月、室蘭で発刊する北海日々新聞(後の室蘭タイムス、同17年に北海道新聞社に統合)に入社するため、室蘭に移住しました。室蘭の短歌同人誌『炭かすの街』を二年半ですが監修しています。

凡平は小樽時代に主宰していた口語短歌誌『青空』の室蘭支部の門下生たちに歓迎され、週に一度、常盤町の自宅で歌会を開くなどして、室蘭の歌壇隆盛に大きく貢献しました。

「おみきのんべい」といわれたほどの酒好きで、生活は楽ではなく、そのためか生活を詠んだ歌が多いようです。

石炭の 切れたことまで 兎は知って
春まださむい 夕小雨ふる

色あせた 夏服出して 染直し
出来るかしらと 妻は呟く

仕事も順調で、編集局次長にまで昇進し、生活も安定してきた頃左手にけがをしました。化膿止めの注射を打ったところが、特異体質だったため血液凝固を起こし、それがもとで昭和16年(1941)9月29日、50歳の若さで帰らぬ人となりました。

室蘭時代の凡平の歌は、戦時下で活況を呈する工業都市の表情や、室蘭の風物を詠んだものが多いようです。

燃え上る 焔は火事と 見るばかり
夜空に高く そそる煙突

(輪西環鐵所)

重工業 都市の意欲を 吊り上げて
トランスポーターは けふも動くぞ

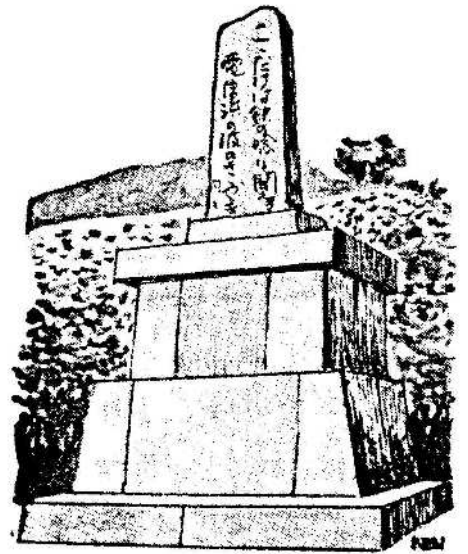
地球岬 見果てぬ夢の あるやうな
太平洋の 夕なぎのいろ

湯がへりの 素肌にしみる ガス深い
この室蘭に めぐる六月

若葉みち ただ一と筋に 友とゆく
地球岬は まだまだといひ

碑は、当時の新聞記者仲間の山本修平、工藤順蔵らにより、刻まれた歌にちなんで、電信浜そばのボンモイ岬に建てられましたが、昭和48年(1973)7月に、現在の常盤公園内に移設されました。歌は、凡平が室蘭日報編輯時代には作られました。

泉 孝 (1916-2007、釧路市出身) 歌人。現代口語短歌を宮柊二、並木凡平に師事。



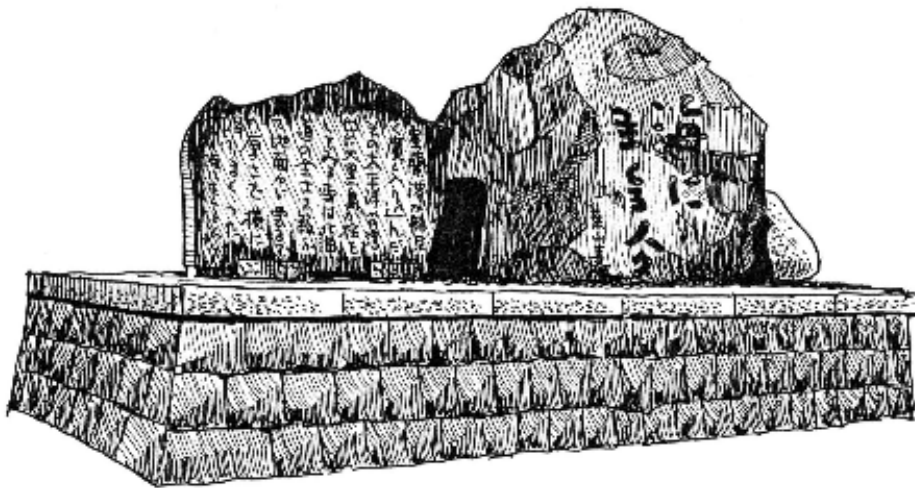
はやま よしき

葉山 嘉樹 文学碑 (昭和61年10月18日建立、入江町 入江臨海公園内)

(主碑)
海に生きる人々

(副碑)

室蘭港が奥深く
廣く入り込んだ
その太平洋への湾
口に大黒島が栓を
してゐる。雪は北海
道の全土を蔽ふ
て、地面から雲まで
の厚さで、横に
降りまくつた
「海に生きる人々」より



明治27年(1894)、福岡県生まれ。大正5年(1916)、室蘭 - 横浜間の石炭運搬船「万字丸」に下級船員として乗り込み、室蘭にやってきました。その時の体験は、大正12年(1923)、治安容疑で服役中の名古屋の刑務所で毎日検問を受けながら書き上げられ、プロレタリア文学の名作『海に生きる人々』として後に世に出されました。

この小説には、平成13年(2001)6月まで中央町で営業していた菓子屋の東陽軒(明治21年創業、小説では東洋軒)をはじめ、当時の室蘭の港や町の様子が描かれています。そして、葉山がけがをして手当てを受けた町立病院の院長は、八木義徳(46ページ参照)の実父、田中好治でした。また、『鴨猟』では室蘭港を描いています。

幼少の頃から小樽で育った小林多喜二(1903-1933、秋田県出身)は、この『海に生きる人々』など葉山の作品から大きな影響を受け、『蟹工船』を書き上げたといわれています。

高さ1m、幅4m、奥行き2mの台座の上に、海を背にして高さ2m、幅3mの有珠山の安山岩の主碑と、高さ1.1m、幅1.4mの黒御影石の副碑、そして日高石の添え石の三つが、心地よい風に吹かれながら、入江臨海公園に建っています。

碑文は、『海に生きる人々』の有名な書き出しの一節で、元室蘭市長で書家の長谷川暹牛(49ページ参照)の筆によるものです。碑の建っている場所は、かつて石炭積み出しの船が出入りして栄えた港を埋め立てたところであり、この碑は単に文学碑であるだけでなく、室蘭港を開発した多くの先達の顕彰碑でもあるといえます。

碑は、建定期成会が中心となって、港を愛する多くの人々の善意によって建てられ、葉山の41回目の命日である昭和61年(1986)10月18日に、菊枝夫人と長女、出生地の福岡県豊津町の町長、室蘭出身の芥川賞作家 八木義徳らを招いて除幕式が行われました。

はせがわ まさはる

長谷川 正治 歌碑 (昭和32年11月25日建立、チャラツナイ展望台)

あめつち

天地の創世 まさに此處に見ゆ

大わたつみの 寄せて止まずも

大正2年(1913)、室蘭に生まれ、室蘭市長も務めた長谷川正治は、歌人であると同時に「遅牛」を号とする全国的にも有名な書家でもありました。旧制室蘭商業学校時代から歌を作り始め、小樽高等商業学校(現 小樽商科大学)に進んでからもその情熱はやまず、昭和6年、明星派を主宰する与謝野鉄幹・晶子夫妻の本道講演のきっかけを作ったのも正治らだったといわれています。

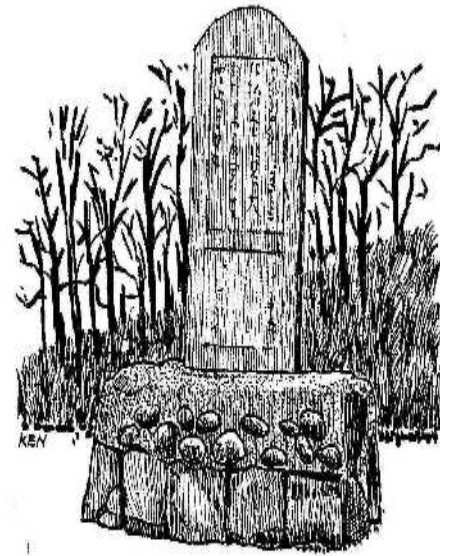
昭和9年(1934)、故郷室蘭に戻った正治は、(株)栗林商会に入社し、愛好家たちと短歌会「栗の花」を結成するなど、大いに活躍しました。

戦後は、社会党や室蘭地協の結成などに参画。政治活動(昭和46年5月～昭和54年4月室蘭市長を務める)に目覚ましい活躍をしながらも幅広い短歌活動を展開し、昭和54年(1979)に歌集『うつせみ』を発売しています。平成5年(1993)2月、80歳で亡くなりました。

碑は、昭和29年(1954)から3年間、失業対策事業として行われた地球岬観光道路の完工記念と、周辺のすばらしい景観を称えようと建立。失業労働者や全日本自由労働組合の組合員に依頼された正治が、歌を作り、自ら筆を執りました。碑は仙台石、高さ1.5m、横0.7mです。この碑は、もとは山側の雑木林を背負って建っていましたが、地球岬観光道路の拡幅に伴い、平成2年(1990)に現在地に移設されました。

歌は「昔アイヌの神々が、天地創造の時に使った道具をチャラツナイの浜に捨て、そのうちオノはあまりに重いため岩になってしまった」という『ニラス岩とムカルソ岩の伝説』(室蘭市の伝説...85ページ参照)を踏まえて作られています。

「ムカルソ」とは、アイヌ語で、オノの意。孔が開いているこの岩は、蓬莱門とも呼ばれている。



さとう きぬこ

佐藤 衣子 歌碑 (平成12年5月15日建立、宮の森町3丁目佐藤邸内)

見あぐれば 鳶とび縹ひょうびょう渺の 輪をかきて
天に己の 位置をたしかむ

昭和5年(1930)、白老町に生まれ、同25年(1950)の20歳の頃から歌を作りはじめ、杉浦翠子に師事し、「短歌至上」で活躍しました。同43年(1968)「洞爺木賊(トクサ)の会」に入会し、室蘭支部長を務め、短歌のほか詩吟やパステル画などもたしなみました。

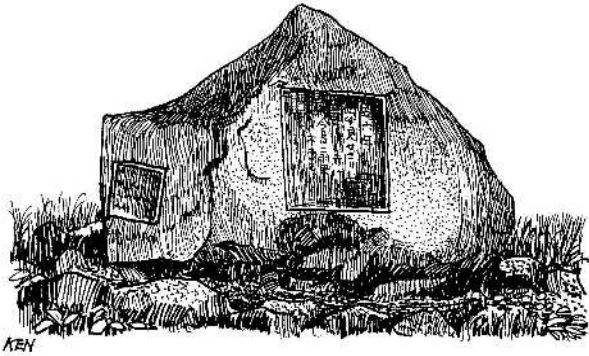
同46年に第一歌集『うみなり』、平成6年(1994)に『敷生川』を出版。詩吟の指導をしています。同7年に室蘭文芸奨励賞を受賞しました。

母 衣子にあこがれて始めた詩吟(岳風会室蘭支部あすなる吟詠会所属)と書道で活躍する長女の渡部睦子(清風)が、衣子の短歌活動50年と古希の祝い兼ねて、平成12年(2000)5月、自宅の庭に睦子揮毫の歌碑を建てました。庭の花や石に囲まれた歌碑は、自然の中に溶け込んでいます。

杉浦翠子(1885-1960、埼玉県出身、旧姓 岩崎翠)歌人。北原白秋に入門、アララギ派入会、斎藤茂吉に師事。多摩帝国美術学校(現 多摩美術大学)の初代学長杉浦非水の妻で、夫妻は「モガ・モボ」として持て囃された。木賊とは、本州中部から北海道にかけての山間の湿地に自生する植物。観賞用などの目的で栽培されることも多く、表皮の細胞壁にケイ酸が蓄積して硬化し、砥石に似て茎でものを研ぐことができることから、砥草と呼ばれている。「木賊刈る」は、秋の季語。

ながきや うめこ

長木谷 梅子 歌碑 (昭和62年7月30日建立、本輪西町3丁目本輪西公園内)



五六年 姿見せさりし 赤けらの
今日は二羽来て 木立を叩く

明治34年(1901)、伊達市に生まれ、同43年に室蘭に転居しました。

昭和21年(1946)から本格的に作家活動に入り、岡本高樹に師事しました。

昭和27年(1952)、岡本高樹主宰の歌誌『いぶり路』創刊に参加し、高樹亡きあとは、その編集発行人

として、同37年(1962)から同誌が100号で廃刊する同39年まで、その任に当たりました。昭和41年(1966)むろらん歌会を結成、短歌誌『月間むろらん』を編集・発刊。

昭和49年(1974)、随筆集『ちいさな足跡』を、同58年(1983)に歌集『面影』を発行。昭和53年(1978)には、室蘭文化連盟から功労賞を受け、同60年には室蘭市教育文化功労賞も受賞しています。平成8年(1996)12月、94歳で亡くなりました。

碑は、この功績を称え、本輪西町会や室蘭短歌会が中心となって、木々の緑、小鳥の鳴き声が聞こえる本輪西公園内に建てられました。長木谷さんの自宅の庭にあった縦1.2m、横1.9mの石の中央の石板に、直筆で歌が刻まれています。

岡本高樹 (1903-1960、兵庫県出身) 室蘭工業大学工業専門学校の助教授、歌人。同人誌「潮音」を主催。

くどう せんじ

工藤 仙二 歌碑 (昭和41年4月19日建立、ホームストア港北店裏ふれあい公園内)

大正5年(1916)、炭坑病院長の次男として夕張市で生まれ、翌年室蘭に移ります。室蘭商業学校在学中に並木凡平が普及させた口語短歌の魅力に取りつかれ、工藤緑雨のペンネームで新聞に投稿するなど、歌作りに励みました。

昭和10年(1935)、小樽に凡平を訪ね、歌作りの意欲の高まる中で、同12年、口語歌誌『炭かすの街』を泉孝らと創刊。師と仰いだ並木凡平が、昭和16年(1941)に亡くなり、凡平の遺骨は長いこと常盤町の本教寺に安置されていました。

復員してきた仙二は、師の命日が来ると欠かさずお寺参りをして供養を続け、同32年、泉孝ら『炭かすの街』同人たちと凡平の17回忌を本教寺で執り行いました。それを契機に凡平の遺骨は、遺児の悦子に抱かれ、亡き妻キヨの待つ小樽へ帰ったのでした。

室蘭文芸界の発展に尽くした功績が認められ、昭和51年(1976)に室蘭文化連盟から功労賞が贈られています。翌52年、心筋梗塞のため60歳で急逝。その後、同60年遺歌集『工藤仙二歌集』が発行されています。

碑は、住んでいた新日鐵港北町社宅の庭から掘り出した石に、自分自身でタガネを振り1年がかりで歌を刻み上げたものです。当初は、自宅の庭にひっそりと建てるつもりでしたが、近所の人の要請で港北町ホームストア前に建立。その後社宅街撤去により、港北郵便局横の空き地に仮移設。

そして、平成2年(1990)の秋に関係者の尽力により、現在地のホームストア港北店裏のふれあい公園内に移設されました。句碑に刻まれた「愛の鐘」とは、当時の社宅街に自治会によって設置されていたスピーカーから、朝と夕方に流された鐘の音です。



愛の鐘 朝な夕なを
鳴りわたる
鐘にくらしを
あわす人たち

やまぐち せいそん

山口 青邨 句碑 (昭和34年6月14日建立、史跡 東蝦夷地南部藩陣跡モロラン陣屋跡内)

明治25年(1892)、旧南部藩の岩手県盛岡市の生まれで、本名は山口吉郎。鉱山学者、東京大学名誉教授。東京大学工学部で採鉱冶金学を専攻しましたが、同期だった芥川龍之介の影響で文学に興味を覚え、大正11年(1922)に高浜虚子が主宰する句誌『ホトトギス』に入門。山口誓子や水原秋桜子とともに東大俳句会の一員として活発な句作活動を行いました。昭和5年(1930)、俳句誌『夏草』を創刊、主宰しました。

昭和20年(1945)11月、ホトトギス系伝統俳句の拠点として、室蘭から発行された俳誌『いぶり』は、戦後北海道で発刊された文芸誌第1号です。創刊当初、『いぶり』の雑詠欄の選者は、旭川の石田雨圃子(いしだうほし)でしたが、昭和24年2月号から青邨が選者となり、それが縁で同34年までに4回来蘭しています。

幌萌の山から運んだ高さ1m、幅2.3mの句碑には、昭和33年に来蘭の際、南部陣屋史跡吟行の折りに詠んだ青邨自筆の句が刻み込まれています。この句碑は、いぶり吟社が中心となり、昭和34年に青邨が選者になり10年経たのを記念して建立しました。

南部藩士末裔の青邨の句碑が、この地に建つのも、歴史の奇縁といえます。昭和63年(1988)12月、96歳で亡くなりました。

芥川龍之介 (1903-1933、東京市出身) 作家。

高浜虚子 (1874-1959、愛媛県出身 本名 高濱清) 俳人・小説家。句誌「ホトトギス」を主宰、ホトトギスの理念となる「客観写生」「花鳥諷詠」を提唱したことで知られる。

山口誓子 (1901-1994、京都府出身、本名 山口新比古) 俳人。高浜虚子に師事し、東大俳句会に参加、東京大学法学部卒業。

水原秋桜子 (1892-1981、東京市出身、本名 水原豊) 俳人。医師、医学博士。松根東洋城、高浜虚子に師事。

石田雨圃子 (1884-1952、富山県出身、本名 石田慶封) 旭川慶誠寺二代目住職。早稲田大学文科卒業、高浜虚子に師事。

黄を
濃くし
陣屋を
出でず
秋の蝶

